# 名古屋市博物館だより

2018.10.1

226

陸軍名古屋特別大演習関係資料

兎形手焙

豊臣秀吉朱印状

今号より、『名古屋市博物館だより』の紙面を大幅に見直し、年２回の発行の中で、博物館資料に関する話題を中心に掲載することにしました。

『名古屋市博物館だより』は、昭和 52（1977）年 10 月の博物館の開館にあわせて発行を開始し、以来 41 年間 225 号にわたって、博物館資料や研究、そして、展覧会の内容や催し案内などを皆様にお届けしてきました。

最近であれば、1 号あたり 8 ページの中で、5 ページ程度を展覧会の紹介やその事前調査などが占め、1 ページが資料紹介、残り 2 ページが催し案内や活動紹介などでした。もちろん、博物館の活動の中で、展覧会は市民の皆様との大きな接点の一つで、重要であることは間違いありません。しかし、近年、インターネットの普及などのため、ホームページや SNS などでの情報発信が可能となり、特に展覧会などの情報はそちらが充実し、また来館者もこうしたネットから展覧会情報を得られる方が多くなりました。こうした時代の流れのなかで、博物館として、紙という限られた媒体の中で何を伝え、残していくべきかを考えるようになりました。

実は『名古屋市博物館だより』の前身として『名古屋市博物館（仮称）建設準備ニュース』があります。昭和 49（1974）年 12 月に発行された第 1 号の冒頭で、当時の市長本山政雄による「創刊にあたって」に以下のような言葉があります。

> 「現在、市民の皆さんのご協力によって資料を収集いたしておりますが、これもその資料一つ一つから過去の『もの』をもう一度見なおして、その『もの』の奥底にひそむ人々の姿を再発見しようとするところに、博物館の仕事があると思います」

名古屋市博物館の資料には核となるコレクションなどがあったわけではく、全くのゼロから収集活動が始まりました。開館に向けて次々と収集される博物館資料やそのための調査の記事に『建設準備ニュース』の紙面の半分以上が割かれており、資料の収集が当時の活動の中で大きな位置を占めていたことがわかります。

今日までの 40 年をこえる収集活動の結果、名古屋市博物館の資料点数は 27 万点にも及びます。博物館にとってこれらの膨大な資料の基本的な情報とともに、そこから文化や歴史を紡ぎ出し、うつろいやすいネット空間だけでなく紙媒体で残しながら、皆様に伝えていくことが重要なのではないかと考えます。このようなことから、一度原点に立ち戻り、博物館だよりも「資料」を中心とした紙面構成としました。

今後もご愛読のほどよろしくお願い申し上げます。　瀬川貴文（学芸課長）

月僊

仏涅槃図

名古屋市博物館だより 226 号
平成 30 年（2018）10 月 1 日
年２回（10 月、４月）発行

編集・発行／名古屋市博物館
〒 467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL　052-853-2655
FAX　052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用

## 月僊
# 仏涅槃図

横尾拓真

縦が３４２cm、横が２７３cmにも及ぶ大画面。１点の絵画作品としては当館で最大の大きさを誇る涅槃図である。江戸時代の中ごろに活躍した名古屋生まれの画僧、月僊（１７４１〜１８０９）が、天明六年（１７６８）に描いたものだ。今回は、ユニークな画風で人気を博した画家による個性あふれる涅槃図を紹介したい。

## 月僊について

月僊は、旧蛯屋町（現西区城西）の味噌商、丹家八左衛門（通称彦八）の家に生まれ、七歳で仏門に入り、浄土宗の僧となった。江戸や京都で修業するかたわら、桜井雪館（１７１５〜９０）や円山応挙（１７３３〜９５）に絵を学んだ。安永三年（１７７４）には、伊勢山田の下中之地蔵町（現伊勢市中之町）にある寂照寺の住職となり、絵を売って蓄えた資を元手にその再興に努め、また貧民救済にも尽力したと伝えられる。ユニークな仙人の絵で人気を博したが、山水画や花鳥画、また本作のような仏画など幅広い主題を描いた。

## 養林寺伝来の涅槃図

涅槃図は、仏教の開祖である釈迦の肉体的な死の情景を描いた絵画で、概ね床に横たわる釈迦とその死を悼んで周囲を囲む人々が描かれる。釈迦の遺徳を追慕する法要、涅槃会の本尊として古来より数多くの涅槃図が制作されてきた。本作は、旧白川町（現中区栄）にあった養林寺（戦後は昭和区西畑町に移転）に伝来し、林霊法（１９０６〜２０００）住職より寄贈を受けたものである。養林寺は、織田信長の重臣、林秀貞（通勝として広く知られる、？〜１５８０）が、永禄五年（１５６２）父の菩提を弔う為に岐阜に建立したのが始まりとされ、その後清須を経て名古屋に移った。上級の藩士を檀家に持ち、郊外には新田を有するなど、城下では寺勢の盛んな寺で、月僊の生家である丹家家の菩提寺でもあった。その縁から、月僊に本作の制作依頼が寄せられたと思われる。安永九年（１７８０）、養林寺は火災によって伽藍のほとんどを焼失しており、本堂の再建に合わせて本作も制作されたと推測されている。

本作が制作された天明年間は、月僊の画業において画風が確立する寛政年間につながる時期であり、円山応挙の影響が窺える丁寧な仕上げの作品が多い時期である。本作もモティーフの一つ一つを緻密に仕上げて巨大な画面を埋めており、大変見応えのある涅槃図となっている。以下、本作の図様や表現に着目しながら、その特徴を見ていこう。

## 伝統の継承〜涅槃図の形式について

本涅槃図の画面構成、釈迦の涅槃に集った諸衆の図様は、先行する作例を引き継いでいると思われる。涅槃会に欠かすことのできない涅槃図は、古来より描き継がれており、現存作例も応徳三年（１０８６）の銘を持つ高野山金剛峰寺本を最古例として数多い。日本に伝存する涅槃図の図様については、大きく二種類の形式に分けて整理されている。分かりやすい注目点の一つは、釈迦が横たわる宝床の向きであり、第一形式は向かって右側面が覗き、第二形式は向かって左側面が覗くといった特徴がある。第一形式は平安時代の作例に多く、鎌倉時代以降、第二形式の作例が中心となっていった。以上の条件を踏まえると、本涅槃図は第二形式に分類されることが理解できるだろう。さらに細部を見ていくと、第二形式のなかでも特定の作例の系譜に連なることが想定される。例えば、宝床の前方で横たわる弟子、阿難陀に水をかける阿那律（挿図１）、一際大きな身体の仁王（那羅延金剛・密迹金剛）（挿図２）、釈迦に最期の布施を行った鍛冶屋の純陀（挿図３）など識別しやすい登場人物を手がかりにすると、近似する図様の涅槃図を見つけることができる。鎌倉時代の作例とされる滋賀県高島市安曇川町、正法寺本（重要文化財）、康永四年（１３４５）、南都絵所の絵仏師によって制作された東京、根津美術館本がそれである。この系統の図様は、名古屋市中区、乾徳寺本など近世名古屋城下の作例にも確認できる。月僊は、本涅槃図を制作するにあたり、粉本（制作の参考となる摸写や草稿）などを通じて先行する涅槃図の図様を素直に受け継いだようである。もちろん、つりあいの取れた身体表現等は月僊の画技の高さを反映しているが、釈迦や会衆の基本的なポーズは先例に基づいている。

挿図1

挿図2

挿図3

挿図4

挿図5

【参考文献】
名古屋市博物館　編集・発行『企画展　尾張の仏教美術　涅槃図―描かれた釈迦入滅の情景―』１９９７年。
名古屋市教育委員会　編集・発行『名古屋市内寺院の仏画』（名古屋市文化財調査報告37）１９９８年。
滋賀県立琵琶湖文化館　編集・発行『釈迦の美術』２００３年。
一宮市博物館　編集・発行『企画展　お釈迦さまのものがたり～涅槃図から読本・草双紙まで～』２００９年。
赤澤英二『涅槃図の図像学―仏陀を囲む悲哀の聖と俗　千年の展開―』中央公論美術出版、２０１１年。

本作は、12月15日（土）から2019年1月27日（日）まで開催される特別展「画僧 月僊」に出陳されます。他の月僊作品と合わせて、ぜひご覧ください。

## 新しい表現〜清新な色使いと写生画風

一方、近世の涅槃図として目新しい要素は彩色と言えそうである。白い画面の清澄さを活かした色使いは、涅槃図の歴史の中でも異色と言えるだろう。例えば、釈迦を取り囲む八本の沙羅の樹、うしろを流れる跋提河、二月十五日の満月の夜空といった背景を見てみよう。一般的には、青や緑の濃い絵の具が塗られる部分であるが、本作では墨と淡い色彩を用いてあっさりと仕上げられている。そうすることで、釈迦や会衆の衣服、装身具に見る濃厚な彩色を目立たせているようだ。抑揚の効いた色使いは、総じて中世以前の涅槃図には見ることのない清新な気風をもたらしている。淡泊さと鮮烈さが同居するこのような彩色は、長崎を通じて流入した中国の作品に影響を受けたと考えられる。隠元隆琦（１５９２〜１６７３）の来日、黄檗宗の伝来に象徴されるように、当代の中国仏教が普及すると、あわせて明末から清にかけての新しい様式の中国産仏画が日本にもたらされた。紙本の地の白さを活かした画面作り、濃密な陰影表現は、黄檗寺院に作例が伝わる福建地方の画家、陳賢などの様式に近い。

色使いに加えて画面下方に集まった禽獣にも近世的表現を見ることができる。白象や獅子など定型的な図様がある一方、身近な哺乳類や鳥類、昆虫などは写実的に描かれている。とりわけ鳥類の描写（挿図４）は、写生図譜のそれを彷彿とさせる。円山応挙に学んだと言われる月僊であるが、写生を旨とする円山派の表現や彼らに受け継がれた粉本などを参考にしたのであろう。月僊自身も実物写生をよくしたと言われ、その経験が反映されているかも知れない。

## ユニークな悲しみの表情〜月僊画の魅力

以上、本涅槃図の特徴を、前時代から継承した要素と新しい要素に分けて概観してきた。月僊は、旧来の形式に基づきながらも、近世の新しい様式を巧みに取り入れることで、個性的な涅槃図を生み出したと言えるだろう。最後に、月僊自身の個性が強く反映された箇所を見ておきたい。釈迦の死を悲しむ諸衆の姿は、前例を引用する旨は先に述べた。しかし個々の表情に着目すると、月僊らしい独特な表現を見つけることができる。それぞれ、赤く目を泣き腫らし、悲しみに暮れる様子を描いているが、不思議と悲痛な趣が無い。誇張された表情は大仰でどこか滑稽でさえある。とりわけ釈迦の上部に来集した菩薩衆の表情が笑いを誘う（挿図５）。感情を激しく発露する弟子や諸天と異なり、菩薩は威儀を失わず慈悲深い様子で描かれるのが通例であるが、ここでは人間味あふれる悲しみの表情を見ることができる。月僊は、独特の風貌を持つ仙人の絵が話題を呼び、全国的な人気を博した画家であった。どうやらその個性は、法要のために制作された仏画にも及んでいるらしい。視覚的興味を惹き付ける面白い表現は、本堂の内陣奥に本尊として掛けられる涅槃図を、より身近なものにしてくれるだろう。そのような本作の性格には、社会福祉事業を通じて、多くの人々に仏の恩徳を説いた僧侶月僊の姿が重なり合うようだ。

# 陸軍名古屋特別大演習関係資料

加藤和俊

大正２年(1913) 11 月、名古屋とその周辺、木曽川から矢作川にまでわたる広大な範囲で、４日間にわたって陸軍の特別大演習がおこなわれました。明治 25 年(1892)から始まった特別大演習はこのころ、年に一度、全国から特定の地域を選んで、複数の師団によって編成された２つの軍が、綿密な演習計画に基づいて模擬戦闘をおこなう、国内では最大規模の軍事演習でした。また他の演習と異なり、天皇が全日本軍の「大元帥」としてじきじきに現地で統監(総合監修)する、最高の格式の軍事演習でもありました。

そのため、大軍を受け入れる準備もさることながら、名古屋に１週間も滞在する天皇や大勢の来賓の迎え入れも合わせ、県下挙げて準備に追われることになりました。県や市が担った膨大な受け入れ作業がいかに念入りにおこなわれたかについては、大演習終了後にそれぞれから報告書が公刊されているため、その詳細を知ることができます。しかし、県・市の任務の担当外であった演習内容そのものについては、どちらの報告書も概要を記すのみであり、部隊の動きなどその詳細はあまり知られていませんでした。

この部分に思いがけず光をあてることになったのは、富田重助家資料という、近代名古屋を代表する地方財閥(紅葉屋財閥)に伝わった、１万を超える古文書群にまぎれたたったひとつの紙袋の中身でした(写真)。袋の表には「名古屋市会副議長　富田重助殿」とあります。宛名の「重助」とは富田家(重助は代々の当主の通称)の当時の当主、重慶氏(1872 ～ 1933)です。彼は名古屋鉄道の初代社長を務めるなど実業界で重きをなす一方で、市会議員ともなり、大演習当時は副議長職にありました。この要職にあった彼が、名古屋市からは市長を含めわずか４名のみが認められた大演習の「陪観者」(観戦者)として、大臣や外国武官らとともに観戦を特に許されました。これによって彼は、大演習の「プログラム」とも呼ぶべき、作戦行動のタイムスケジュールを含む『戦況概要』などを、演習の進行に合わせて次々に手にすることができたのです。

この紙袋の中身、30 余点の内容は、受け入れ作業(特に天皇行幸・来賓接待)・演習陪観・観兵式・天皇拝謁・御宴会に分けられます。彼が観戦したこの大演習を戦う２軍は、三河方面から進軍して尾張平野占領を狙う東軍(名古屋第３師団・豊橋第 15 師団)と、岐阜方面から進軍してこの東軍の撃退を使命とする西軍(金沢第９師団・京都第 16 師団)でした。この両軍それぞれに４日間分の『戦況概要』があり、そこには各日の各軍司令部からの命令やそれに応じた各部隊の移動時刻と地点、また中山道方面などの仮想上(机上)の別軍の動静や翌日の戦闘配置に向けての前進・退却などが、まさに手に取るように記されています。

またこれと併せて配布されたのが、大元帥による統監時刻(１時間程度)の、約 10km にもわたる両軍部隊の布陣を記した『両軍位置略図』(第３日は大移動が主体のため作成されず)です。そこには各師団・旅団・騎兵旅団・連隊・砲兵陣地などが地図上に記号(東軍は青・西軍は赤)で示されており、この演習がいかに大規模におこなわれたものであるかを実感させてくれます(写真中央左・第１日)。

陸軍名古屋特別大演習関係資料(富田重助家資料のうち)

大演習中に各書類や手紙を時々刻々と伝達した封筒までもが、手ずからの開封の跡も生々しくそのまま保管されているなど、この紙袋はまるで、この一大イベントの関係品一式のタイムカプセルといった感すらあります。この大演習が、思いがけず天皇に拝謁する光栄となった重慶氏にとっては、これらの品は生涯の記念品であったのかもしれません。

# 兎形手焙

藤田紗樹

江戸時代後期　瀬戸製　加藤春宇作
高さ 17.5cm
２階常設展示「尾張の歴史」テーマ９で展示中

手焙は、炉の時季の茶の湯で、待合や席中に置いて暖をとるための小型の火鉢である。

白いうさぎがうずくまる姿を、特徴を捉えながら大胆にデフォルメしてかたどり、灰と炭を入れるために背中を大きく刳りぬいている。全体に白い釉薬が均一にかけられ、目には赤が加えられている。

毛並みを表すために体全体に浅い線彫りを施しており、背中部分は背に沿った直線的な彫りで後ろに流れる毛を表し、脚部は等間隔に弧を描くように彫りを入れてうさぎの後ろ足が曲がった様子を表現するなど、彫り方には変化を与えている。前足は、四本の指と爪一本一本までを線彫りしており、細部にまで気が配られている。

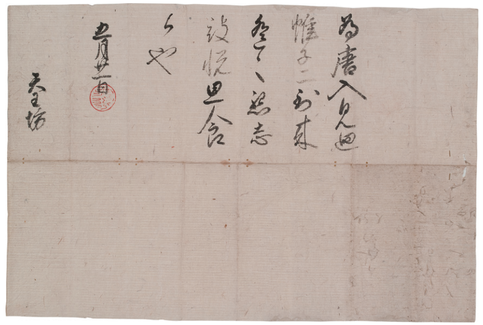
うさぎは小首をかしげているように見え、やや口角があがった口元や、小さく飛び出した尻尾がかわいらしい。雪のちらつく露地の待合にこの愛らしいうさぎがいたならば、炭火に手をかざすだけでなく、思わずなでてみたくなるだろう。

底部には、作者加藤春宇(?～1827)の「春宇」印が押される。春宇は瀬戸で陶祖とよばれる加藤四郎左衛門景正の一系である加藤武右衛門家の三代にあたり、江戸時代後期に尾張国瀬戸村で活躍した陶工で、尾張藩の御用を務めた。

春宇は本手焙のような彫塑的な作品のほか、織部、志野、御深井など様々な種類の焼物をこなしたが、それらは重厚でがっちりとしたものが多い。本館が所蔵する「織部菊紋水指」(下写真)は、その特徴をよく示しており、春宇の作域の幅広さをうかがわせる。

# 豊臣秀吉朱印状

羽柴亜弥


(天正 20 年) 5 月 21 日付　天王坊宛
縦 43.5cm ×横 65.8cm

秀吉は、天正 18 年(1590) 8 月小田原の戦いで関東を支配していた後北条氏を倒し、天下統一を成し遂げた。その後、天正 20 (1592)年３月 13 日、かねてから計画が進められていた朝鮮出兵の命令を下した。同年３月 26 日には、数千人もの大行列を率いて華々しく京都を発ち、朝鮮出兵の拠点、肥前(現在の佐賀県)名護屋城へと出陣した。「文禄の役」の始まりである。

今回紹介する資料は、秀吉が肥前名護屋に到着した約１ヶ月後、天正 20 年５月 21 日に尾張名古屋の天王坊宛に出した朱印状である。天王坊が「唐入」の陣中見舞として贈った帷子に対する、秀吉からの礼状だ。わずか４行半の礼状ではあるが、この文書は様々な情報を私達に伝えてくれている。

この朱印状の宛先「天王坊」とは、三之丸天王社(現那古野神社)別当を務めていた、真言宗亀尾山安養寺華王院である。名古屋城三の丸周辺にあった寺で、古くから那古野の寺院として資料に登場し、織田信秀以降の領主達から寺領の安堵や寄進などをうけている(明治の廃仏毀釈によって、廃寺となった)。秀吉と懇意にしている人や寺社は、名護屋出陣の報を聞くと、すぐに陣中見舞を用意し、激励の気持ちを伝えた。同じ年に、尾張の寺社では、政秀寺・惣見寺・津島神主が、秀吉に陣中見舞を贈り礼状をもらっている。

ここで発給された年にご注目。本文に「天正 20 年」と書かれていないが、なぜ、この年とわかるのだろうか。「唐入」というキーワードがあるからだ。朝鮮出兵の際、秀吉は非常に多くの礼状を発給している。その多くのお礼状の文言を分析すると、「唐入」という表現は、朝鮮出兵が始まった初期の頃にしか使用されていない。秀吉の居所と、「唐入」という表現を根拠に、天正 20 年のものと比定されている。

続いて、礼状が出された日付、５月 21 日に着目してみよう。この日付までの秀吉の動きを確認してみると、３月 26 日京都発、４月 25 日に肥前名護屋に到着、そして１ヶ月経たないうちに、天王坊が尾張から運んだ帷子を受け取り、５月 21 日に礼状を発給したということになる。さて、尾張名古屋から肥前名護屋まで行くにはどれくらいかかるのだろうか。事例として秀吉が各所に移動した時の記事を参考に、各所要時間を計算してみると、肥前名護屋―京都間を早くて 22 日程、京都―尾張間は約６日かかって移動している。つまり、最短でも約１ヶ月はかかるという計算になる。天王坊は、２ヶ月余という期間、名古屋城から名護屋城まで直線距離にして約 670km を往復する労力を使って、はるばる帷子を贈ったのである。朱印状の日付をみると、天王坊の使いは、秀吉が肥前名護屋に到着する前に、尾張を出発していたのではないかと考えられる。前述したその他の寺社に対する礼状について、政秀寺・惣見寺は５月２日付で発給されており、確実に秀吉名護屋到着前、ほぼ京都出発時頃に使者を派遣している。尾張の人々は、離れた場所にいる秀吉の情報をいち早く的確に掴んで、対応をしていたことが読み取れる。

また、天王坊・政秀寺・津島神主に宛てられた朱印状が、写しではなく原文書で残っていることも、確認しておきたい。多くの寺社は秀吉の朱印状を大切に保管し、現在まで残してきたということだ。苦労して届けた品への礼状であるから、また海の向こうに出兵するという大事件にまつわる書状だから、秀吉様からの有り難い礼状であるから、尾張の人々の様々な思いを推測できて面白い。

「朝鮮出兵」と聞くと、海を渡った向こう側の戦況に目が行きがちではあるが、実は尾張でも関連した様々な動きがある。今回紹介した資料は、秀吉の朝鮮出兵に対する尾張の人々の反応を伺える、興味深い資料である。